他学会紹介

2026 Asian Chemosensory Meeting に参加して
―上海で感じた研究の勢いと日本のこれから―

竹内　春樹

（東京大学大学院理学系研究科 生物科学専攻）

2026 年 10 月 21 日から 23 日まで、上海科技大学で開催された 2026 Asian Chemosensory Meeting に参加してきました。2024 年に岡山で始まり、昨年は韓国で開催されたこの会議は、アジアの化学感覚研究者が集まる場であると同時に、2028 年に日本で開催される International Symposium on Olfaction and Taste（ISOT）に向けて、研究者同士が交流し、新たな連携を築く場でもあります。昨年の韓国大会で講演したこともあり、今回は参加するつもりはなかったのですが、ISOT 2028 を見据えたアジア各国との連携に向けて、先方からセッションチェアを依頼されたこともあり、上海へ行ってきました。

今回、まず驚かされたのは、会議の規模と参加者の顔ぶれでした。これまでの大会は日本・中国・韓国の研究者同士の交流が中心でしたが、今回は世界の化学感覚研究を牽引する研究者が招かれていました。ヨーロッパからは、前回の ISOT2024 で大会長を務めた Bill Hansson 先生や Peter Mombaerts 先生、アメリカからも Sandeep Robert Datta 先生、Richard Doty 先生、Hiroaki Matsunami 先生など、嗅覚研究の第一線で活躍する先生方が参加されていました。招待講演者の顔ぶれからは、キーストン会議やゴードン会議を思わせる会議のレベルの高さがうかがえ、参加前から期待が高まりました。

空港では、学生たちが私たちの名前を大きく記したボードを掲げて出迎え、ホテルまで車で送ってくれました。ホテルは大学に隣接しており、海外からの参加者が移動や滞在に気を取られず、会議や研究交流に集中できるよう配慮されていました。会場となった上海科技大学は、創立から十数年ほどの新しい大学です。整然としたキャンパスを歩くと、大学全体が計画的につくられている印象を受けました。特に、自転車や自動車の動線が地下に整備され、地上には広い通路や建物が配置されていたのが印象的でした。研究施設や宿泊環境も含め、中国が科学研究を推進するために整えている環境の一端を見ることができました。

10 月 21 日に参加者が集まり、翌 22 日から本格的な講演が始まりました。日本からは、次期 ISOT 大会長を務める東原先生をはじめ、吉原先生、廣田先生、今井先生、山下先生、野村先生らが登壇し、素晴らしい研究成果を世界に発信していました。韓国からは新進気鋭の若手研究者が招かれ、トップジャーナルへの掲載を期待させる質の高い発表が行われました。中国からは、海外で研究室を主宰した後、近年中国に研究拠点を移した研究者や、中国を拠点に長年重要な成果を上げてきた研究者が発表していました。個人的には、成長著しい中国の研究者による実験の規模に圧倒されました。研究の価値はデータの量や論文の掲載誌だけで決まるものではありませんが、豊富な資金と多くの人材に支えられた研究の勢いを、発表や研究環境を通して実感しました。

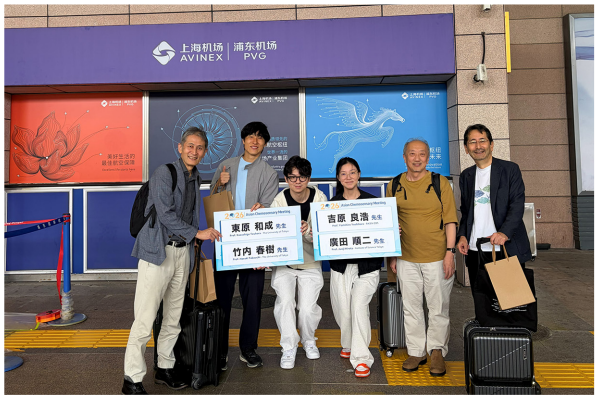
印象に残ったのは、研究の規模だけではありません。学生たちの関心や意欲の高さにも心を動かされました。空港からホテルまで送迎してくれた修士課程の学生は、私が今回講演しないことを不思議に思い、以前発表した研究がその後どう進展したのかを知りたがっていました。私の過去の研究にまで関心を寄せてくれていたことに、まず驚かされました。ポスター会場では、私が発表者に意見やコメントを伝えていると、近くにいた学生たちが集まり、その内容を熱心に書き留めていました。議論から学び、自分の研究に生かそうとする意欲が感じられました。そうした姿を見て、博士課程への進学や研究者を目指すことに悩む日本の学生たちのことを思い浮かべました。限られた経験から両国の学生の意欲を単純に比べることはできませんが、学生たちを取り巻く環境の違いについては考えずにはいられませんでした。意欲は個人の資質だけで生まれるものではなく、研究に取り組む環境や、研究を続けた先にどのような将来が開けるのかという見通しも、若い世代の意識に影響するのでしょう。現地では、中国の一部の大学で、インパクトファクターが一定以上の雑誌への論文掲載が博士号取得の要件になっていると聞きました。こうした評価方法には議論の余地がありますが、博士号取得への強い動機づけと、そのた

めに求められる高い水準が、活気ある研究環境を支える一因になっているように感じました。「博士号は足の裏の米粒――取らないと気になるが、取っても食えない」と揶揄されることもある日本の状況を思うと、何とも言えない気持ちになりました。

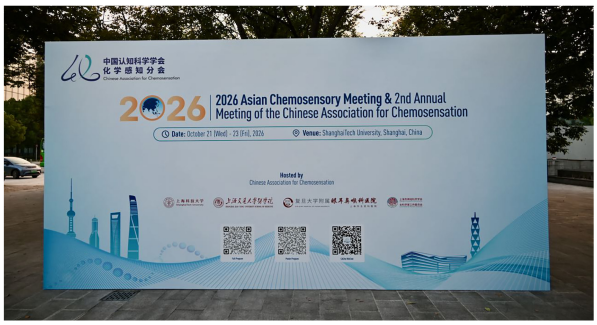
今回のシンポジウムでは、講演者以外の日本人研究者の参加は限られていました。私の知る限り、私が参加を頼んだ新村先生と、企業の若手研究者1名だけでした。上海は日本から飛行機で2時間程度と、比較的訪れやすい場所です。それだけに、これほど世界の第一線の研究者が集まり、化学感覚研究の最新の動向を知ることのできる機会に、日本からの参加が少なかったことを少し残念に感じました。もちろん、会議に参加できるかどうかは、研究の進捗や日程、予算など、さまざまな事情に左右されます。しかし、こうした国際学会は成果を発表するためだけの場所ではありません。世界の一流の研究者が何を問い、どのような方法で研究を進め、どこに関心を向けているのか。そうした世界の研究動向を知ることは、自分の研究を見つめ直し、次の問いを考えるうえで大きな意味があると思います。この学会の告知を見て、「我こそは」と思った学生は、日本にどれほどいたでしょうか。研究成果の有無にかかわらず、若い研究者や学生にも、こうした場に積極的に足を運んでほしいと思います。世界の研究の最前線に実際に触れることは、研究者としての視野を広げるきっかけになるはずです。

今回の会議を通じて、日本の基礎研究が直面する課題を改めて考えさせられました。限られた資金や人員で、中国や米国と同じ規模の研究を進めるのは容易ではありません。では、日本はどのような強みを磨き、世界に存在感を示していけばよいのか。すぐに答えは出ませんが、改めて大切にしたいと感じたのは、研究者一人ひとりの知的好奇心を出発点に問いを立て、目の前の現象をじっくり掘り下げていく研究のあり方です。こうした探究の姿勢は、日本で培われてきた研究の強みの一つではないかと思います。

2028年のISOTは日本で開催されます。日本の化学感覚研究を国内外に発信し、研究者や学生が世界の第一線で活躍する研究者と交流する、貴重な機会となるはずです。ぜひ日本から多くの研究者や学生に参加してほしいと思います。そして、この機会を一過性のものにせず、日本の化学感覚研究のさらなる発展につなげられるよう、日々の研究室での学生指導や学会運営に力を尽くしていきたいと思います。



上海の空港で出迎えてくれた学生たちと
左から東原先生、私、王さん（学生）、孫さん（学生）、吉原先生、廣田先生。



上海科技大学のキャンパス内に設置された看板



参加者とのランチ
Yangkyun Oh先生（左）、著者（中）、Myunghwan Choi先生（右）　新村先生撮影



各国代表による Opening Remarks
左から東原先生、Donggen Luo先生（中国）、Greg Suh先生（韓国）